

IV 元気な地域づくり活動の支援

耕畜連携のかけはし！！ 飼料イネの良質種子生産に向けた支援

中部農林振興局
(中部農業改良普及センター)



1 活動のねらい

飼料イネは、平成12年に本県において92年ぶりに発生した口蹄疫を機に自給飼料として大きく注目された。また、水田での栽培に適し既存の水稲用の機械を活用できることから、新たな転作品目や遊休農地解消対策として推進してきた。

○飼料イネの栽培面積の推移 単位：ha

年度	H13	H14	H17	H20
中部管内	410	527	495	664
県全体	1,018	1,432	1,417	1,881

急激な作付面積の拡大に当たり、優良種子の確保が急務となり、早くから飼料イネに取り組んだ国富町において平成12年に塚原飼料イネ採種組合が結成された。

生産農家も種子生産は初めての経験であり、さらに飼料イネの品種は当初から長粒種が選定され、県内に長粒種の採種事例もなかったため、組織の育成と契約数量の確保及び良質種子の生産に向けた支援を行ってきた。

2 普及活動の経過

(1) 栽培管理方法の確立

飼料イネの品種は、「t e - t e p」から、「モーれつ」を経て「ミナミユタカ」と変わってきた。いずれも長粒種で倒伏に弱かったり脱粒しやすいなど、それぞれちがった特徴を持っており、栽培暦もなく手探り状態からのスタートであったため、年によっては契約数量を確保できないこともあった。そこで施肥や水管理、漏生籾対策等について採種組合や関係機関と検討を重ね、栽培方法の確立を図ってきた。



ミナミユタカ種子 コシヒカリ種子

(2) 栽培講習会

作付前には、栽培管理、漏生籾対策等の講習を行っている。特に基肥については、可給態窒素の分析を実施し、それに基づく適性施肥の指導を行っている。

また、穂肥の講習会では、葉色や幼穂の生育状況を確認し、穂肥の施用及び病虫害防除等を指導している。



栽培講習会

(3) 作業受託組織及び共同乾燥所との連携

収穫を行う機械利用組合や乾燥調整をする共同乾燥所と、収穫日の調整、コンバインや乾燥時間の設定等を検討し、収穫から仕上げ段階の品質向上を図っている。

(4) 稲こうじ病の対策

平成18年産種子では、稲こうじ病が発生し、対策が必要となった。平成19年から防除や発生状況の調査、ほ場審査での除去の指導を行っている。

(5) 枝梗対策

平成19年産種子では、種子籾に枝梗が残ってしまい、育苗の際に播種機に詰まる問題が生じた。「ミナミュタカ」は穂が大きく収穫時に枝梗の青い未熟部分が若干見られたことから、20年は登熟の状況を見ながら収穫を例年より7日から10日ほど遅らせる指導をした。

3 活動の成果

(1) 契約数量の確保

現在採種している「ミナミュタカ」は登熟が進むと倒伏しやすくなる特徴があるが、土壌診断と現地講習会による適性施肥の支援により、若干のなびきは発生するものの、倒伏は非常に少なくなってきており、平成18年からは契約数量を達成している。

○近年の飼料イネ種子生産実績

年度	H16	H17	H18	H19	H20
採種ほ面積（a）	750	980	980	980	1,080
契約数量（袋）	1,505	1,960	1,960	1,960	2,160
生産数量（袋）	978	1,548	1,953	1,960	2,160
達成率（%）	65.0	79.0	99.6	100	100

注）平成16年と17年は台風の影響を受けた。

(2) 稲こうじ病の低減

適期防除指導により周囲の飼料イネほ場より発生は少なくなっている。

(3) 枝梗の低減

収穫期を遅らせ登熟を進める指導により、19年産と比較して20年産は枝梗が播種作業に問題のないレベルまで少なくなり改善された。

4 今後の課題

(1) 種子の品質向上を図るとともに、契約数量の安定確保を図る。

(2) 稲こうじ病の防除時期や薬剤を再点検し、発生の抑制を図る。

(3) 組合員の高齢化が進んでおり、今後の地区の営農について検討する必要がある。

5 対象集団の声

宮崎県全体の飼料イネの種子生産を担っており、責任が大きいですが、近年は契約数量を達成できており、より良質な種子の生産に努めたい。

経営の中でも種子生産は重要な位置を占めており、良質な種子を生産し、経営の安定につなげていきたい。



塚原飼料イネ採種組合の皆さん